

アセスメントポリシーに基づく検証結果（2023年度）

2024年8月7日

内部質保証向上委員会

2024年3月12日の特別教授会において、東京神学大学アセスメントポリシーに基づき、学修成果達成状況の検証を行った。特に、「在学中」「卒業時（後）」に挙げている指標に基づき、本学の教育効果を検証した。

（学部・大学院博士課程前期課程）

「機関レベル」「教育課程レベル」のいずれにおいても、本学建学の目的である福音主義キリスト教教役者の養成という目標に向けて、教育活動は適切に行われていると言える。

2023年度は、学部4年次在籍15名のうち、1名が前期末で、さらに1名が後期末で中途退学したが、13名に学位が授与され、留年者はいなかった。卒業した13名のうち12名が、伝道者となる召命を改めて認められ、大学院博士課程前期課程に進学した。進学しなかった1名は、神学研修志望枠の学びを全うして卒業した学生である。

また、大学院博士課程前期課程は、2年次在籍者12名全員に学位が授与された。うち1名は、昨年度修士論文を提出できずに留年した学生である。その全員がそれぞれ教会・学校に派遣された。

このように、大学の教育課程、また大学の歩み全体を通して、高い割合の者が学位を取得し、また伝道者として派遣されるに至っている。もっとも、本年度は学部4年次の2名に加え、さらに学部で1名の中途退学者があったが、いずれも学力の問題であるよりは本人の召命に関わるものであった。従って、直ちに教育課程の問題であるとは言えないが、どのように召命の確立に関わりそれを促すのかについて、常に検証し、さらにサポートできることがあればしてゆきたい。

卒業時アンケートにおいて、学位授与方針に掲げられている各項目について、学部及び大学院博士課程前期課程それぞれでどれだけ身についたかの自己評価を求めているが、どの項目も「十分に身につけた」「ある程度身につけた」の回答が多く、学生自身も、本学の教育課程を通して、伝道者とされるための力が身についたと自己評価していることがうかがえる。

また、日本基督教団の教会に派遣された者について、1名を除く全員が日本基督教団補教師試験に合格した。さらに、2020年度に卒業して本年度に日本基督教団正教師試験を受験した卒業生は、1名を除いて合格し、残る1名も半年後の試験で合格している。こういったことも、本学の教育課程が伝道者養成のために有効に機能していることを示すであろう。

在学中の成績については、学部・大学院博士前期課程とも、ほとんどの者が大学院内部進学基準あるいは学位授与基準の2.00を十分に越えている。また、修士論文も提出した12名全員が合格した。2023年度は、特別な指導の対象となる「学修に困難を抱える学生」（GPA1.90未満、あるいは単位の修得に2割以上の遅れのある者）に該当する者はいなかった。それでも、2.00に近い者やわずかに下回る者が数名あり、そういった学生がさらに高い学修成果を上げることができるよう、どのように学修支援の体制を整えて行くこと

ができるのかは課題である。特に、日本語を母語としない留学生の GPA がやや低い傾向にあり、日本語補講などを行っているものの、さらなるサポートが必要であるかどうかは、今後さらに検討すべきであろう。

博士課程前期課程の最終学年での履修を課し、学長が担当する「説教学演習Ⅲ」は、学部・大学院を合わせた伝道者養成課程の成果を測る格好の場である。2023年度の授業においては、聖書を語ろうとする姿勢はよく身についており、本学の教育課程が有効に働いていることを裏付けているものの、一つのテーマを首尾一貫した仕方で語る力や、日本語力の不足がしばしば見られたとのことであった。同様の指摘は、夏期伝道実習における教会からの評価の中にも見受けられる。論理的に考える力、また日本語力について、どのようにその向上を図るのが今後の課題となるだろう。

「科目レベル」については、授業効果調査（授業アンケート）において、授業が自らの召命のために役に立ったかどうかとの問いには、ほとんどの学生が「はい」と答えており、授業が、伝道者を育てるといふ本学の使命に概ね適するものとなっていることが読み取れる。授業の準備にあてる時間については、シラバスにおいて、1回の授業あたり3～4時間を目安とすることが明記されているが、講義系の科目は1回の授業あたり概ね1時間未満あるいは1時間から2時間との回答が多く、演習系の授業の中には2時間以上との回答が目立つ授業もあった。ほとんどの授業について負担は適切であったとの回答であったが、どのようにその準備学習を指示するのが今後の課題である。

伝道者の養成は、教会との協力の下で進められて行く必要がある。本学では毎年「出席教会牧師と教授会との懇談会」を開催し、その協力関係を深めている。また、夏期伝道実習においても、実習先の教会から、実習した神学生の評価をしていただいている。本年度、出席教会牧師からは、本学とさらなる協力関係を築くためにも、出席神学生の本学での様子を定期的に知らせたいとの要望が出されると共に、牧師が異性の神学生を指導する際の距離の取り方で悩んでいる様子も見受けられた。よりよい指導が教会でなされ、教会と一体となって伝道者を養成して行くために、さらに協力関係を深めて行きたい。

（博士課程後期課程）

博士課程後期課程は、2023年度の在籍者は12名、うち5名が休学（うち1名は後期に復学）した。同年度中の学位取得者はなく、同年度末を以て1名が在籍期間満了となった。なお、以前に博士課程後期課程に在籍していた者が論文博士を取得し、2024年度から本学の特任常勤講師に任用された。

博士課程後期課程の生産性向上は、引き続き本学の課題である。学位取得に至らないのは、教会や学校での奉仕の傍ら研究時間を確保することの難しさが主要な原因であり、それは毎年度末に提出を求めている研究報告書からも読み取れる。その中でも、研究を奨励するために、本年度も後期課程研究発表会を行って2名に研究の発表を求め、それは論文の体裁を整えた上で『伝道と神学』に掲載した。また、部門によっては、定期的に博士課程後期課程の学生と研究者による研究会を開き、共同での研究発表の機会を設けている。

そのような中、論文執筆にかけることのできる時間を少しでも長く与えるために、他大学の例を参考に、博士課程後期課程在籍期間満了後、3年を目途に論文を提出すれば、本学在学中の研究と指導に基づく成果であると見做して課程博士を授与できるよう、規則改

定を目指し、2024年度中に施行されることになっている。

今後も、制度の改善を含めてさらに何ができるのか検討を続け、「神学における国内外の学界へ学問的貢献ができる専門的学識を有し、高等教育機関において研究者また教育者として貢献し、教会や社会のあり方についての諸課題に深く取り組むことのできる」伝道者を育成することを目指していきたい。